

またやる気を失わせないようにしつつも、【思考・判断・表現】する姿を見取るためにどのような活動を行うのがよいのか、今後も試行錯誤が求められそうです。

また、【主体的に学習に取り組む態度】の「自己調整」については、児童が「自己調整の方法」を知ることが必要であり、自己調整する場面が確保されなければ見取ることはできません。さらに、自己調整する力は、外国語科だけで身につくものではありません。そのため、例

えば振り返りのしかたをすべての教科・領域で統一したり、発達段階に応じた振り返りのしかたについて学校全体で議論をしたりしていかなければならないでしょう。

評価についてはまだまだ課題も多いのですが、それを解決しようと模索することは、児童の成長を見取る活動を見だし、授業力を向上させることにもつながります。2学期以降も、児童が自ら学びを深め、育っていく姿を見取れるよう、取り組みを続けていきたいと思います。

充実した指導が導く 児童と教師のための評価



ひがし ひとみ
東 仁美

聖学院大学教授。小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)理事・トレーナー検定委員。
光村図書 小学校英語教科書『Here We Go!』編集委員。
著書に『小学校英語 はじめる教科書 改訂版』(共著/mpi松香フォニックス)など。

学習評価に関する資料を読んでも、いまひとつはっきり伝わってこない「**実際**」の指導と評価。山川先生の報告には、「これが知りたかった!」と思える5年生1学期の評価実践がわかりやすくまとめられています。公立小学校での実践で、評価についてこれだけ緻密に計画できるということは、多くの先生方の励みになるでしょう。山川先生の評価計画が優れている理由は、①昨年度の評価実践をもとに今年度の実践計画を立てている、②指導体制や授業準備が充実しており、そのことがすばらしい実践につながっている、③「話すこと[やり取り]」のパフォーマンス・チャレンジのねらいが明確で、

児童の実態に合わせて作成されたループリックが活用されている、④「話すこと[発表]」では、指導の中で【思考・判断・表現】を見取れるような発表の工夫がなされていること、等が挙げられます。

小学校の教育課程全体で指導と評価を捉えており、学校が児童をどう育てていくかという、評価のその先までを考えさせられる実践です。「聞くこと」の評価に関しては多くの課題があることも認識しており、「聞くこと」の【思考・判断・表現】の見取りをどのように工夫されていくか、今後が楽しみです。